〔書　評〕

石綿敏雄著

『外来語の総合的研究』

米川明彦

はじめに

本書は「外来語研究の概略を，あるかたちでまとめて述べたのものである。（略）先行の研究と筆者の研究をなるべくコンパクトなかたちにまとめて記述することにした」「要するにこの本は，外来語にかんする主要な話題を網羅的に取りあげ，筆者の立場から簡潔にまとめて記述しようとしたもの」（あとがき）で，外来語研究概説書である。その意味で本書は，荒川惣兵衛著『外来語概説』（1943年，三省堂），楳垣実著『日本外来語の研究』（1963年，研究社），上野景福著『英語語彙の研究』改訂増補版（1985年，研究社）につぐものである。久しくなかった外来語研究概説書が，これらの書の後の研究成果を盛り込んで，新たに公刊されたことは大変喜ばしい。手際よくまとめられており，おそらく末永く重宝されるであろう。

本書の構成

本書の構成は以下の通りである。

序章　外来語について
　0.1　「外来語」について
　0.2　外来語と外国語
　0.3　外来語と翻訳語
　0.4　日本の西洋系外来語研究略史
第1章　現代日本語のなかの西洋外来語
　1.1　西洋外来語の計量的実態
　1.2　外来語の変容
　1.3　外来語の表記
　1.4　西洋外来語と日本語の表現
　1.5　西洋外来語と社会階層
　1.6　近代西洋外来語の歴史
　1.6.0　西洋外来語史の時代区分

1.6.1　近代・現代における西洋外来語変遷の概観
1.6.2　近代・現代の社会相と新語・流行語のなかの西洋外来語
1.6.3　語形・表記・意味の変遷
1.6.4　生活・専門分野と原語の問題
第2章　日本語のなかの西洋外来語の歴史
2.1.1　南蛮船時代の外来語
2.1.2　言語的環境・言語生活など
2.1.3　キリシタン用語
2.1.4　通商・一般用語
2.1.5　受容時の音変化と語形のゆれ
2.2.0　江戸時代前期の西洋外来語
2.2.1　江戸時代前期文学の西洋外来語
2.2.2　特殊な文献にあらわれる西洋外来語
2.3.0　江戸時代後期の西洋外来語
2.3.1　江戸時代後期文学などにおける西洋外来語
2.3.2　蘭学など，オランダ語系外来語のリスト
2.3.3　オランダ語系外来語における語形と意味のずれ
2.3.4　幕末外国関係資料にみえる外来語と外国語
第3章　外来語の対照言語学的研究
3.1　日本語のなかの外来語と英語のなかの外来語
3.1.1　日本語のなかの東洋外来語，漢語を中心に
3.1.2　英語のなかの外来語，フランス語ラテン語を中心に
3.1.3　意味・用法の変容の対照研究
3.2　世界の諸言語への英語の影響
参考文献リスト
あとがき
カタカナ語索引

第1章は，明治時代から現代までの西洋外来語を「歴史的な変化のなかにおいてとらえることをこころみた」（あとがき）もので，目次からも推察されるように，第1章が本書の半分を占め，「もっとも多くのページをさき，したがって重点をおいた部分である」（あとがき）ので，本書評でもこの章を主に取り上げることにする。

第2章は，室町末期から江戸末期までの西洋外来語の歴史的な研究である。

第3章は，外来語の対照言語学的研究の試みである。

文献目録は，「かなりおおはばに省略した」（あとがき）という。参照すべき文献が本文

に引かれていないところをみると，著者が言うように省略したものは沢山あろうが，未見のためにリストに挙げられていない文献もあると思われる。

カタカナ語索引は，本文に例に出した西洋外来語を掲げたものである。評者が数えたところ，2300余りあった。かなり多くの外来語が本文中に引かれていることになる。著者の視野の広さをうかがわせる。

本書の内容

序章は「外来語」とは何を指すかについて述べて，著者は中国から入った漢語も含めて「外来語」とする立場をとり，東洋系の外来語を「東洋外来語」，西洋系の外来語を「西洋外来語」「カタカナ語」と呼んでいる。外来語は外国から入ったことばであるならば，漢語も外来語というのは筋が通っており，外来語を「総合的に」考えるには，当然のことであろう。

このように，東洋系外来語（漢語）を古代から現代まで一貫してとらえることは有意義なことがある。著者はそのことについて，「日本語が中国語から大きな影響を受けたあとを一貫して見わたすことができることである。漢語と現代中国語音の外来語は一つの大きなつながりをもつものであることがわかる」（p 8）と述べている。これは優れた視点であり，新しい発見が期待できる。しかしながら，本書ではそれが実行されているとは言い難い。本書は西洋外来語の研究成果の集大成で，その証拠に，「カタカナ語索引」があるのみである。第3章に東洋外来語について触れているが，これは対照研究のもので，古代の漢語から現代中国語までを歴史的にとらえたものではない。したがって，上記の研究はこれから始まると理解してよい。第一歩をしるしたということであろう。

上記に関して，ひとこと触れておこう。日中戦争時に日本語に入った中国語は少なくない。雑誌『キング』1940年新年号付録『ニュース便覧　一問一答新語新問題早わかり』には，「合作」「姑娘（クーニャン）」「工部局」「公路」「銭荘」「租界」「文治派」「買弁（まいべん）」などがある。いずれも当時，中国から入ってきた語であり，少年雑誌に取り上げられているところから，相当使われていたか，話題になっていたかと思われる。これらが外来語全体の中で，また漢語全体の中でどう位置づけられるのか，などはこれからの研究課題である。

第1章は，明治時代から現代までの西洋外来語の計量的実態・語形・意味・表記・役割・理解度・歴史・分野などの諸問題を概観している。

計量的実態は，著者が国立国語研究所時代にかかわった調査研究の結果を扱ったもののほか，各種の結果から，漢語と西洋外来語の性質が似ていることを指摘している。こういう指摘は，外来語を東洋外来語と西洋外来語とを合わせて考えるところから出てくるものであって，普段見落としている大切な指摘である。

外来語が氾濫しているように見えるが，計量的にはそうでもないということについて，石野博史氏の意見を引いて，その理由を説明し，「なお，ほかにも理由があるかもしれな

い」と付け加えている。これについて，評者は以前，小文[注1]を書いたので，参考に書いておこう。理由の第一は特定の分野に集中しているため。第二はこの分野が関心が高く，雑誌によく使われるため。第三に語形が長く，目立つため。第四にカタカナ表記が目立つため。第五に外来語の音が耳につくため。第六に意味不明の語が多いため。第七に商業主義による新奇な安易な使用が目立ち，嫌悪感を持たれるため。第八に従来の日本語で言えるのに，ことさら外来語で言うことに反発感を持つため。

外来語の表記について，1954年の国語審議会部会の報告（外来語表記の原則）を順に紹介しているが，原則4（促音表記），6（拗音表記），15（Xの発音表記）が抜けている。これはどうしてなのだろうか。

1.4は，現代日本語の中で，西洋外来語がどのような役割をはたしているかを述べている。この項は，著者の『日本語のなかの外国語』（1985年，岩波新書）に「七つの成立事情」を述べたところと重なるが，新たな指摘や例があり，大変参考になる。外来語の長所と短所を述べたところでは，西洋外来語と漢語と比較して，「西洋外来語のほうが日本語のシステムをこわさないということも，たしかにあるといわなければならない」「東洋系のことばのほうがむずかしくて，カタカナ語でいったほうがわかりやすいということもあり，それはかならずしもめずらしいことではない」「漢語がわかりやすく，外来語がわかりにくい，というまえに，漢語のなかにもわかりやすいものとわかりにくいものがあり，外来語のなかにもわかりやすいものとわかりにくいものとがある，ということを述べたのである」（p 108〜p 110）と書いている。外来語を東洋系と西洋系を含めて考える立場から出た発言として，傾聴に値する。

1.5は，西洋外来語の理解度・普及度についての社会言語学的研究の成果を紹介している。全般に若い人ほどよく理解しており，また，よく普及している。さらに，若い人ほど西洋外来語を支持している。これは著者が言うように「若い層は，老人層にくらべて，その時代環境の差から，学歴も高くなり，必修同然になった英語教育も徹底普及し，外来語の理解と使用をささえる条件がさらに強化されると考えられる。外来語普及につごうのよい環境の変化は以前にくらべて急激なのである」（p 124）からである。しかし，大学で授業をしていて感じる，若い層の教科としての英語嫌い，英語レベルの低さ，興味の偏り，読書離れなどを考えると，若い層に西洋外来語が普及し，支持されるのは上記の理由以外にまだあるのではないか。彼らの思う西洋外来語とは彼らの興味がある分野（多くは趣味娯楽）の，いわゆる軟派に属する語であって，いわゆる硬派に属する語ではないのではないか。

1.6は，西洋外来語の歴史を述べている。時代区分について，著者は室町末期から江戸初期，江戸時代，明治時代から現代と3区分している。その理由は「明治以後を一つにしたのは，他にくらべて時間的に最初に細分するほど長い期間ではないことと，外国との接触が自由に幅ひろく行われたという意味で均質な内容をもつと考えたからである。

室町末期，江戸時代，明治以後の三時代は，それぞれポルトガル語，オランダ語，英語など，というソース言語の異なりに対応する」(p 126)からである。すなわち，時代の期間という長さとソース言語という出自による区分である。また，江戸時代は第2章では前期と後期に細分されて記述され，明治以後は明治時代，大正戦前昭和時代，戦後現代に細分されて記述されている。大きく見れば，これらの区分は妥当であろう。しかし，細かく見るとき，ソース言語については異論はないが，長さについて，国際交流，マスコミの発達，教育の普及，経済発達などを考えると，昔は長期間を区分にとっても問題はないが，現代に近づくほど期間は短くても充分な区分の期間になるのではないか。評者はそう考えて以前，外来語の歴史の時代区分を，主に教育と経済の観点から行ったことがある[注2]。

1.6.2 は，明治以後の社会，世相と新語・流行語の中の西洋外来語を「ごくあらいスケッチをこころみる」(p 133)。ここでいう「新語・流行語」は厳密な意味ではなく，当時，使われていたという程度である。「ごくあらいスケッチ」とはいえ，広範囲に調べなくてはできないものである。おおざっぱにでも世相と外来語を見ることができるので大変便利である。ただ，列挙された語のうち，流行語は「ハイカラ」「ガール」「エロ」「モダン」「オーケー」「アプレゲール」ぐらいであった。特に戦後はテレビという媒体，大学生という使用者に焦点を当てて見るなら，もっと流行語の外来語を拾えたのではないか。なお，評者も流行語の中の外来語を書いた小文[注3]がある。

1.6.4 は，外来語がどの言語から来たのかを専門分野別に取り上げている。「ここではいくつかの分野を例として選んで取りあげ，その用語全体をごくあらく観察するにとどめる」(p 157)という。この項も前項と同様に，大変時間がかかる調査があってはじめてできることで，労作である。評者もスポーツの外来語・衣服の外来語・映画の外来語など分野別に歴史を詳しく調べたことがある[注4]。これらの積み重ねで，より良い概観ができるが，興味ある研究テーマに取り組む人はほとんどいないようで，残念である。また，著者は原語を安易に英語と処理する外来語辞典・カタカナ語辞典を批判している。耳を傾けるべき意見である。

第2章は，室町末期から江戸末期までの西洋外来語の歴史を扱っている。室町末期から江戸初期にかけての時代を「南蛮船時代」と呼んで，著者の過去の研究の成果をまとめて書いている(55ページにわたる)。すなわち，「南蛮船時代のデータ収集は早くから手をつけていたのに，まとめる機会がなく，いまやっとこれを総合的に記述することができた」(あとがき)と述べ，江戸時代の外来語は「概略をあつかっている」(p 173) のに対して，南蛮船時代のそれは，「やや丁寧に」(p 173) 扱っている。

南蛮船時代のキリシタン用語と通商・一般用語の西洋外来語の記述と，それに先立つ当時のポルトガル語とスペイン語の状況についての記述は，各種の資料から用例を引いており，教えられるところが多い。

江戸時代は前期と後期に分けて，文学作品から西洋外来語を引いて概観している。これは著者ならではのことである。

なお，『外来語の総合的研究』の5か月前に，古賀十二郎『外来語集覧』（長崎外来語集覧刊行期成会）が出された。同書は『長崎方言集覧』（1925年）の著者が明治末から昭和初期にかけて研究執筆した遺稿を刊行したもの。長崎への外来語を原語別に立て，意味，用例，文化などを語誌記述している。見出し語5061語，内訳は東洋語69語，ラテン語227語，オランダ語1520語，ポルトガル語3245語で，スペイン語の原稿が不明になっている。もう少し早く刊行されていたら，著者石綿氏も本書に反映して，第2章は少しちがったものになったのではないだろうか（参考文献リストには同書が掲げられていない）。

第3章は，「外来語を，言語の対照研究の観点から取りあつかってみた」「日本語のなかの外来語と外国語のなかの外来語を比較対照する研究」（p 251）である。著者は二つの問題を取り挙げている。「一つは日本語のなかの外来語とくに漢語と，英語のなかの外来語を比べることである。もう一つは現代の世界のなかでは英語が他の言語にあたえている影響がいちじるしいが，そのなかのいくつかのケースをとりあげてみることである」（p 251）。前者は，東洋外来語である漢語が借用先の日本語の中でどのような意味・用法を持っているのかを，英語に入ったラテン系の外来語のそれと比較すること，すなわち「西洋のフォザミと東洋のフォザミをくらべてみようとする」（p 251）研究である。この問題は「おおしごとになるので，とてもみとおしをつけるところにはいたらない」「ここでできたことは，その作業は第一段階にとどまり，その類似性の指摘にとどまっている」（p 251）とはいうものの，意欲的な試みであり，これからの研究成果が大いに期待される。著者自身も「漢語も外来語としての性格を十分にもつものであることにはふれえたとおもう」「フォザミの研究はまた日本語教育，日本人の外国語習得の問題としても意味のあることであるとおもう」（p 251）と述べて，研究の意義を確認している。後者は，従来ほとんど行われていなかった世界の諸言語への英語の影響を取り上げたもので，大いに評価されよう。しかし，著者は謙遜して「きわめてプリミティブな段階にある。その第一歩」（p 252）と述べ，情報の提供が主たる目的と言う。

次に本書に取り上げられなかったことについて，評者の意見を述べておこう。あくまでも欲を言えばという程度と思ってもらいたい。まず，和製英語の問題である。本書では和製複合語の語構成を扱っているが，著者の『外来語と英語の谷間』（1983年，秋山書店）の「和製複合語の問題」の一部をまとめたもので，英語と比較して構成要素のどこが一致するかを概略している。しかし，和製英語の諸問題，たとえば，なぜ和製英語はそのような語構成になるのかとか，英語になく，和製英語にあるとはどういう意味なのか，とかいった文化の問題は触れられていない。また，近年，目立つアクセントの平板化についても触れられていない。前者を扱った研究が見当たらなかったのかもしれないが，後者はあるので言及してほしかった。さらにまた，外来語の変遷，たとえば外来語の交

替（バンド→ベルト）や外来語の死語化[注5]など，語と背景についても触れてほしかった。もうひとつ加えると，外来語の動詞化・形容動詞化・慣用句化などの用法[注6]も触れてほしかった。しかし，だからと言って，これらが本書の評価を下げることはない。はじめに書いたように，末永く重宝される研究概説書にまちがいない。

全体的感想

著者は『日本語のなかの外国語』（1985年，岩波新書）の中で，外来語の語誌の研究がほとんどされていないと指摘し，外来語の生態を問題にする際に，その語誌を含めた総合的な記述が必要であると述べている。評者はこれを読んだことがきっかけで，「ハイカラ」の語誌を調べたことがあった[注7]。しかし，その後，外来語の語誌記述は一度も行っていない。労多くして，実の少ない研究ということもあって，なかなか進められずにいる。著者の前書が出てから16年経ち，状況はほとんど変わっていない。この優れた著書『外来語の総合的研究』を読んで，若い学徒が外来語研究に，とくに語誌研究に目覚めてもらえればと願う。

著者の『現代言語理論と格』（1999年，ひつじ書房）の書評（仁田義雄）が『国語学』第52巻2号に掲載されている。仁田氏は著者の研究・記述姿勢に対して，「大事なところや総体をまず概括的・全体的に（したがって見方によれば粗く）捉えることに重点を置き，細かい違いや残された未解決の問題にさほどこだわらない，という姿勢が上げられよう。小異を捨て大同につくといった融通性のある姿勢をも感じる」と述べ，「実務的全体俯瞰（網打ち）型」と名づけている。評者は本書もこれと同じ印象を受けた。

評者はこれまで著者の先行書によって数々の学恩を受けてきたが，今また，あらたに加わった。感謝。

最後に誤植を指摘しておく。

	誤		正
p 12 の 4 行目	前田一郎	→	前田太郎
p 179〜180	「せみなりよ」をはじめとする14語のひらがな表記	→	カタカナ表記に（索引にある語とない語がある）
p 229 の 11 行目	江戸時代時期	→	江戸時代前期
p 315 の下から 4 行目	明治大正新語流行語辞典	→	明治大正新語俗語辞典
p 321 の 17 行目	経理用国語学	→	計量国語学

注1　拙稿『月刊言語』1995年12月号（大修館書店）の「チャレンジコーナー」シニア版

注2　拙稿「近代における外来語の定着過程」『京都府立大学生活文化センター年報』第9号，1984年

同「現代の外来語の流入」『日本語学』1991年4月号，明治書院

同「外国文化の移入と外来語」『国文学』1996年9月号，学燈社

注3　拙稿『言葉に関する問答集　外来語編(2)』(1998年，文化庁) の問12の答

注4　拙稿「近代における外来語とスポーツ」『論集日本語研究(2)歴史編』宮地裕編，1986年，明治書院

同「近代の衣服と外来語」『梅花女子大学文学部紀要（国語・国文学)』1987年

同「近代の外来語と映画」『日本語学』1987年1月号～4月号，明治書院

注5　拙稿「死語化した近代の外来語――慣用句と間投詞の場合――」『国語論究第6集』1997年，明治書院

注6　拙稿「近代外来語の用法」『日本語学』1988年2月号，4月号，5月号，明治書院

注7　拙稿「ハイカラ」『日本語学』1993年6月号，明治書院

(2001年3月9日発行　東京堂出版刊　A5判　360ページ　本体価格7,000円)

――梅花女子大学教授――

(2001年12月1日　受理)